

言霊と文字と現代日本

著者名(日)	井口 浩一
雑誌名	嘉悦大学研究論集
巻	44
号	1
ページ	93-101
発行年	2001-12-21
URL	http://id.nii.ac.jp/1269/00000039/

言霊と文字と現代日本

井 口 浩 一

〈要 約〉

この世は、生命の創造ということによって成立している。したがって、常に新しい。その創造から祝福をもって遣わされた存在自身が、言霊や文字であると言っていい。このことから、彼らの役割は、徹底して、創造に参加することにおかれているに相違ない。その、永遠の経過が、瞬間ごとの事実というふうになっているとみて、誤まりはないであろう。

私達は、かかる事実、(言霊や文字を通じて)、素直に言えば、そこに、いやでも幸福は招来されずにはいないはずである。私達の親も、言霊や文字と同じ、創造にあるからである。

事実を事実とすること、(自己自身を愛すること)、そういう生活を実践すること、つまり表現すること、そのことが、私達の生命の唯一の使命なのではなかろうか？——歌を唄う、ということは、そういう営みを言う言葉として継がれてきているように思う。ここから、歌を、美しく唄うことが、誰にも大切なこととして登場してくる、と、私は考えている。

しかし、現代のわが国は、かかる、事実を事実とする生活から、よほど離れてしまっているとしなければならぬ。多くの不調和の原因は、この反事実、反歌唱性に由来している、とみなしていい。

言霊にかえること・文字そのものの古里を訪ねること、つまり、日本語で歌を美しく唄うという、私達のありのままの素直さが、現在、私達には天来の声として響いてきていると私には思われるのである。

〈キーワード〉

事実、創造、生命、歌を唄う、表現、生活、新しい、美、単純、今、純粹、孤独、音（楽）、言霊、文字

I 言^{こと}霊^{たま}について

言霊とは、何か。言霊とは、言葉による生命^{いのち}の創造であって、単純な世の事実と重なるものである。

生命の創造は、いつの時代、どういう所にあっても、常に、今日・唯今のことである。平成の世の今日も、言霊は、既に終ってしまったことなどではなく、まさに、誰もの今の神である。生命が創造されることほど、生^あるとし生るものにとって、貴いことはまたあるものではなかろう。世は、この創造という事実のみに覆われている、と言っていい。

しかし、かかる畏敬すべき言霊が、誤解や中傷のうちにあったら、ことはどうであろうか。不幸は、実在する、としなければならないであろう。いや、不幸は、決して実在するわけではなく、私達が、わざわざ不幸を招くために、そして、誰一人、自ら招いているとは思わぬために、あたかも、不幸が実在するかのような錯覚に陥いるのだ、と言うべきであろう。生命が、一時たりとも不幸であった、などということは、古往今来、瞬時といえどもないためである。言霊は、徹底した平

和主義を貫くものであり、生命尊重を家訓とするものであって、それ故に、いつでもどこでも、誰にでも、懐かしいのである。けれども、私達は、なかなかそのことに気づかないので、かえって潜在する心（ウラ）では、懐かしくてたまらないのである。

言霊における誤解や中傷とは、それでは、いったいどういうものなのか。いま、そのうちの主なものを掲げてみたい。

1、言霊は、古代人がもっていた、言葉への信仰であること。⇒言霊は、終ったことであり、現代人には、関わりがないものである。

2、言葉に霊力を認めることは、日本のみならず、未開社会・一般にある現象だ、ということ。⇒未開社会どころか、世界の先進国・科学技術文明の先端をはしる現代日本に、言霊（信仰）などは、話にならぬものである。言霊（信仰）は、それ自体が、未開・野蛮なものなのである。

3、言ったことが、現実化する、という言霊は、信仰以外、考えられない、ということ。⇒現代社会における、健全な市民にあって、「言」と「事」との相即不離性など、一顧の価値すらもたないものである。

4、『神代より 言ひ傳て來らく そらみつ 倭の國は 皇神の 厳しき國 言霊の幸はふ國と語り繼ぎ 言ひ繼がひけり 今の世の 人もことごと 目の前に 見たり知たり——後略』¹⁾ と言うのであるが、実際は、ある特定の言語様式にのみ、言霊が発現したものらしい。たとえば、祝詞・祭文・和歌などである。一般の世俗語からは、のぞむべくもない、ということ。⇒現代においても、このとおりである。たとえば、「中臣祓言」（大祓詞）や、「ひふみ神歌」、所謂・「古代歌謡」などの詞章に言霊は宿泊している。したがって、それらを暗誦することが欠かせない作業である。また、散文ではなく、韻文（三十一文字のヤマトウタ）を創り、朗誦することにも、意義を発見できよう。（但し言霊賛仰者）。

矢印の前が、いずれの辞書・研究書等にも掲載されている「説明・解説」であり、後の部位が、その「説明・解説」の効果である。

このような、一見、正しいかのように思える「説明・解説」が、何故、「誤解や中傷」なのかと言えば、言霊が、一から十まで、言葉であるにもかかわらず、その言葉を、死んだものとして扱っているからである。日本語に限らず、およそ、言葉で、死の言葉というものは、事実として存在しない。言葉は、常に生きていて、どこでも、生きていて、それを、静止したもの、物理をあてはめんとする発想、そのことが誤まりなのである。さらに、静止状態や物理的知識と理屈に合わない部分を、後進性として裁断すること、そのことが中傷なのである。ところが、静止や物理を、進歩とか、文化である、と思いこんでいる説明者や研究者は、自分達の営為を、寸毫も中傷だ、とは思わぬために、つまり、結果として、傲慢を科学と言い張っているために、自らをそこね、ヒトをそこね、無論、言霊をそこね、文化をそこね、「わざわざ不幸を招」き、「不幸が実在する」のは、当然であるか、または、人間や社会の幸・不幸などは、学問？とは関わりがない、というような思い上がった言動を、平気ですることとなるのである。（私は、ここにその人名や、記述を転記するに忍びない）。『私は、人の虚榮を非難しようとは思ってゐない。ただ、おのれのヴァニティを鏡にうつしてよく見ろ、といふのである。見た、結果はむりに人に語らずともよい、語る必要はない。しかし、いちどは、はっきり、合せ鏡して見とどけて置く必要は、ある。いちど見た人は、思案深くなるだらう。

謙譲になるだらう。神の問題を考へるやうになるだらう²⁾。

『歌はたゞ、ひとつ心をいひ出るものにしありければ、いにしへは、こととよむてふ人も、よまぬてふ人さへあらざりき³⁾』。よく知られた、太宰治と真淵の言葉である。さも、あらん、と思われ。こういった生活からしか、言霊は、発現するわけがないのである。もし、かかる生活を、平成の現在、私達が、正直に素直に、そして、つましく実践するなら、どうして言霊が働かぬことなどあるだろう。言霊という言葉など、まったくもって眼中になく、『人のこゝろひたぶるに、なほくなむ有ける。心しひたぶるなれば、なすわざもすくなく、事し少なければ、いふ言のはも、さはならざりけり。しかありて、心におもふ事あるときは、言にあげてうたふ⁴⁾』、ということで、私達に、世の不思議は現出するのである。「生命の創造」を、この眼で観るのである。新しい言葉が、歌を唄うからであり、言葉が、己が性情の一回性に、滑稽なほど陶醉するからである。

美の永遠と瞬間とが、ツヨサとモロサが、何のわだかまりもなく現成する。幸わせが、忙しそうなふりをして通り過ぎる。

^{からころむ}韓衣裾に取りつき泣く子を置きて^きそ來ぬや^{おも}母なしにして。⁵⁾

これが、日本のリアリズムなのであり、言霊なのである。——子別れ。しかし、言霊のそれは、何という大きな大きな孤独に泣いているのだろう。『言霊の 幸はふ國』(言葉の魂が、豊かに栄える国)の人々が、『こととよむてふ人も、よまぬてふ人』もなく、誰もが公平に、「孤独」の『人』であったのは、「孤独」の歌が、正しく唄えたからだ、と考えるほかはない。知識が、かつて、歌を唄ったことなどあったのだろうか。理屈が、一度たりと、「孤独」のうちに、己を沈めたことなどあったのだろうか。しかし、言霊の歌は、それらの、反表現派に属する人々にも、それこそ、わけへだてなく、生命を保障する歌を、忘れずに唄うのである。かくして、『ひとつ心』は、いつだって、休息がないのである。そうでありながら、そこに万一、美がなかったとしたなら、この宇宙は、たちまち崩れずにはいない、としなければならないだろう。

桜に、梅を咲かせること。それが言霊だ。(こういう低劣な考えは、知識や理屈にすらなっていない)。誰もが、いつでも、「花咲か爺さん」になって、桜に、桜を咲かせること、美しく咲かせること、それが言霊である。それが、表現、ということである。新しい、ということである。生命の顕現ということである。いつもが、現在、ということである。——「爺さん」は、その時、どこかの枝にとりついたりしているのだろうか?。既に、どこにも、居ないのである。私達は、本当は、これが自分である、などと主張でき得る、ナニノモノも所有してはいない。私が、はっきり消えているので、桜は、桜を世に現わさざるを得ない、そう言っている、と私は思う。私と桜は、『ひとつ』である。縄文や、それに継ぐ時だけが、日本中を神社としていたのではない。今も、そうである。ここに、言霊の現代的意義があるに相違ない。

II 文字について

『少年時代、私は「源氏物語」や「枕草子」を読んだことがある。手あたり次第に、なんでも読んだのである。勿論、意味は分りはしなかった。ただ、言葉の響や文章の調を読んでいたのである。

それらの音読が私を少年の甘い哀愁に誘いこんでくれたのだった。つまり意味のない歌を歌っていたようなものだった。⁶⁾』——後略。

これは、川端康成が、その著・『新文章読本』・『まえがき』に掲載している、『古い私の文章の一節』で、『読みかえしていま、文章の秘密もそこにあるかと思う⁶⁾』と述懐する主要部分である。『私はその歌声にそむくことは出来ない。⁶⁾』、と。

川端氏は、日本人が日本語で書いた小説・物語・随筆等の文章について、このことを述べているのであるが、私がここで記述しようとする、日本人が日本語を書いた文字についても、川端氏の述懐は、そのままあてはまると言ってよい、そう私は思うのである。『意味のない歌を歌』うこと、それは、文章の『秘密』であるのかも知れない。しかし、同時にそれは、文字の『秘密』でもあることは確かなのである。太宰治氏は、『文字を読みながら、そこに表現されてある音響が、いつまでも耳にこびりついて、離れないことがあるだらう⁷⁾』（「音について」）とか、『君に聞くが、サンボルでなければものを語れない人間の、愛情の細かさを、君、わかるかね。⁸⁾』。とかの文章を草している。川端氏と、どこも変わったところがない。

文字とは、少なくとも、日本人が日本語を書く文字とは、『意味のない歌を歌』うことなのである。つまり、文字には、もともと形がないのである。したがって、意味もない。『愛情の細か』い『音響』が、そこには響いているだけなのである。

文字と言え、即座に、その形や意味を探索し、且つ、そのあり方こそ唯一である、と決めつける向きがあるようなのだが、いかがなものであろうか。第一、それは、品下ったふるまいではあるまいか？。欲が深くはないか？。しかし、こういう文字への決めつけは、昔も今も、百八煩惱と熾烈をきわめているようである。「ここには、何が書かれているのか」、と人は言う。けれども、「どう、書かれているのか」、とは問おうとしない。美は、醜とされ、醜は、美とされる。だから、太宰氏は、次のように書かざるを得ないのである。『文章を無為に享樂する法を知らぬ。やたらに深刻をよるこぶ。ナンセンスの美しさを知らぬ。こ理くつが多くて、たのしくない。お月様の中の小兎をよるこばず、カチカチ山の小兎を愛してゐる。カチカチ山は仇討ち物語である。⁹⁾』川端氏や太宰氏が、現今の若者の、携帯電話における文字（記号）板熱中症を望見したら、おそらく自分達は、人の國の人にまじっているのか、とうろたえるに違いない。日本の文字は、とびぬけて、マジメなものなのである。純粹なものなのである。義経が、好きでならないのである。わかれば、イイ、とか、読めれば、イイ、とかいうのは、どこからどう考えても、わが国の文字観にはない。文字は、歌を唄うことだからである。常に、それは、新しいからである。旋律と拍が、我が身内に在り、且つ、生り続けるから、そういうことが可能となるのである。漢字が、すぐれて呪的な発生を保有しているらしい、と想到されるのも、このことをないがしろにしたなら、まったく、単なる唯物論の延長でしかなくなってしまうだろう。

歌を唄うこと、それが、文字の根源的な、また、現象的なことをついているとすると、「上手に書こう」とすることは、誠につまらぬあがきである、と言わなければなるまい。さらにそれは、人間として、決して誉められたあり方ではない、とも。そして、かかる人が、もし、社会の中で大多数を占めるとなれば、その社会は、全体として虚栄に満たされ、鼻持ちならないであろう。では、逆に、「下手に書こう」、あるいは、「相手が読めさえすれば、文字の役割は果たされている」、とするなら、当の本人も、社会も、快哉を述べるべきなのか。とんでもないことである。虚栄どころか、ここには奴隷しか生息してはいまい。いや、おそらく奴隷以下、動物のような人間のような、泥水

をかぶった^{ぬえ}鵜が、来る日来る日を、闇としてもがく、そういう最下等の社会以外、想像できそうにない。人が、自らの美を売却するからである。

現代の日本、と言うより、戦後のわが国は、おしなべて、上にみるような、価値の顛倒者を増産することによって、国力(?)を充実させてきた、どうもそういう観が、私には深い。

——この原因は、思慮を甚だしく欠いた、所謂、外圧と、我が国民性との相乗作用が、突出したかたちで考えられるが、今は、ふれない。

具体例を、いくつかあげてみたい。

ア、役所や銀行の窓口における、諸所定用紙の末尾には、必ず、次のような注意書きが印刷されている。「必ず、ボール・ペンを用い、楷書でご記入ください」。

イ、謄本類は、手書き→タイプ→ワープロ(パソコン)、と変化している。

ウ、義務教育における、文字教育、及び表現としての正しい文字認識への喚起は、ほとんどゼロに等しい。それどころか、暗々裡に行われている文字への蔑視は、年々、その度を増している。無論、教授者を育成しようとする気など、始めからないのであるから、教授者自身がいないのである。これではならじ、とされる先生も、残念なことには、基礎が修得されていないため、教育が空転してしまいやすい。

エ、文字の半可通が増加している。いや、生兵法・ナマザトリなら、まだまだヨシとしなければならぬだろう。多くの半可通は、文字を、知識や技術、虚栄の具としてとらえている。「永字八法」を知ったところで、どうして、文字が書けるだろう。しかし、この種の人々は、自らのいい加減な勉強をなんとかして、人の前に公示したいのである。その害毒は、(程度の低い人格を含め)とりわけ青少年に危険である。

オ、美醜の判断を世俗に求め、それを唯一のものとして、自・他に強要する者が増加している。「手書きで、申しわけありません」。——この卑屈な無教養ぶりを、しかし、戦後教育は、自主性尊重の美名のもとに、どれほど応援してきたことか。

あげ出したら、キリがない。要するに、とりわけ戦後は、わが国全体が貧しくなったのである。自分達自身は、豊かになった、外国へ経済援助をも行っている、情報技術も、世界の先端をはしっている、などとウワツイているが、一転、眼を世相に向ければ、恐怖感・不安感がつまった日常に呻吟している。ハーンが、涙をおさえきれなかった、美しい日本は、いったいどこへ行ったのか、マザー・テレサは、何故、つらくて、苦しくてかなわない心を、イヤイヤと奮起させつつ、わが日本に檄を飛ばされたのか。

私は、さすがに、その、すべての理由が、日本人自ら、自分達の文字(文化)を、相対の位置にまで急落させたからだ、とは言える自信がない。けれども、七・八割、それはあたっているはずだ、と思えてならないのである。上掲の、ア——オの事例のみであってさえそれこそそのことは、自信をもって申し上げられる、と言っていい。

ア——オに共通する文字観は、何なのか。

文字は、読めて、わかれば、それで用は済む。それには、規格品が一番である。規格品こそが、唯一、正しく美しい。そこへ行くと手書きは、各個バラバラで、統一性がなく、おまけに上手・下手の品等がある点、非民主的、非科学的である。要するに、文字は、人間の意思を伝達する具であるから、記号とみるべきであろう。こういうことなのである。

文字を、「意思を伝達する具」だから、「記号」としてしか把握できない、とする戦後・日本の頭の悪さは、「わが国全体が貧しくなった」のではなく、本当は、「わが国全体が」滅んだのだ、と言うべきなのだろう。このことは、文字のみに限らず、「便利なことは、いいことだ」式の、批評精神を根本から欠いた発想と実践の一切に及ぶ、とみていいように思う。文字も、言語も、「意思を伝達する」などといった役目は、その全質量の、何千・何萬分の一にしかあたらない。だから、文字も、言語も尊いのである。本当の文字・本当の言語は、いつだって新しい。新しいから、創造のコトにあずかれるのである。歌を唄うからである。そして、歌には、「意味」などという下品なことは、まったくないのである。このことのために、文字（そうして、言語、その水源としての歌）は、全世界を、己のウチに蓄えることができるのだ、と言っていい。無常とは、ひとりインドの森、特有の産物でもなく、わが中世・隠者文学の独占でもない。ただ、まったく単なる、ありのままの事実である。このことが、文字を正しく書く秘訣である。混ぜものをしてはならない。純粹に、事実にお任せをすれば、もう、それで一切は成っているのである。誰もが、そのようになるのである。誰にも、生命があるからである。その生命には、意味だとか、計測だとか、まして損得などは、徹底してない。何も、ない。何もないから、歌がある。歌があるから、いつでも、どこでも新しい。いつでも、どこでも新しくなければ、それは、文字とは言わないのである。象形という言葉が、元来、私達にはそう見える、という、恐ろしいまでに、ありのままを現象化させんとする営為であるらしい、と気づけば、漢字を祖型とする仮名が、どうして「記号」であってよいだろうか？。まして、遊糸連綿ともなれば、この世の「無常」を、十全に表現しようとする、矛盾の狂熱に、いかほど己が体を焼いていることだろう。爛れさせているだろう。伝・行成の書が、美しいのは、その焼ける炎が、見える人には海の波のように観えるからである。——今日も、海は、太古からの波を、私達の磯に寄せ忘れたりしていない。

Ⅲ 現代日本について

書けもしない楷書を書けと強要する銀行や役所の言い分は、次のようなものである。行・草書、女文字等々での表記となると、誤読や、あるいは、まったく読めないという事態が多くなってしまっているものである。言いづらいことを申せば、行・草書も可とすると、デタラメにくずす方が多く、とても、正確さを基調とする業務には、不向きなのだ。第一、機械での読み取りが、できないでしょう。

この言い分は、明確に、自由の否定（不自由の肯定）であり、事実への不遜な挑戦としか言えなからう。私達より、機構や制度が大事だ、と言うわけであるから、アルものをナイとし、ナイものをアルとしている点、先記した顛倒と同じである、とみなしていい。美は、常に、こういうシカケで姿を消す。（実際は、姿を消したように見える、というだけなのだが）。——銀行や役所の方は、自国に、楷書の書ける方がどれほどおられるか、お考えになったことがあるのだろうか？。「私は、楷書がかけます。」そう言いきれぬ人というのは、私の見当では、おそらく国内で十指を折ることすらむずかしいのである。——要するに、指示する方も、される方も、この世は上手に渡って行くのがいいのだし、また、それができるようになっているのだ、という不純なうえに生活しているのである。そういうふうに使われても、それは、しかたがないとしなければならない。最も問題とすべきなのは、かかる生活の濁りを、それと気づかず、むしろ、自分達は、正しいことを言い、正しい

ことを実行している、と決めてかかっている、その精神の鈍さなのだ。しかも、実は、その濁りを濁りとして、内心では、ひそかに自らささやいても居る気配があるのである。かくして、「高野切」や「三色紙」を見ようものなら、獐猛な嫉妬心を爆発させる。また、「上代様」を書く人へも。そのうえで、この子どもだましの自我は、知識や理屈といった相対的でしかないものに縋って、次のような舌鋒に慰安を求める。——いつでも、どこでも、誰でも、それがどういう状態か、ということが、一つの方法によって、全く等しく得られるということ。これが、科学である。楷書を書いて、どこが悪い！。

本当の科学は、宇宙の事実^{じじつ}にそうものではあるまいか？。ひたすら、事実を、事実故に尊敬すべきものではあるまいか？。それならば、事実とは何なのか？。各個は、個である。そして、それ故に普遍である。人間は、皆、同じである、という思想は、人間は、各個が各々、個人として独立しているから、はじめて成り立つのである。だからこそ、わがまは、いましめられる。人間は、つましくなければ、ウソなのである。こういった経緯が、「それはどういう状態か」、という記述で胸におちるだろうか？。「それは、どうしてか」という問で、はじめて、己が生命に慄然とするのではないのか？。楷書は、どうして、楷の書と言うのだろうか？。第一、楷は、どうして、この世に在るのだろうか？。いや、在るように見えるのだろうか？。そして、いったい楷とは何なのか？。どこへ行くのだろうか。どうしてそうなのだろうか。さらに、書とは、何なのか？。そもそも、そのように問う、いったいあなたは、誰なのか？。どこから来、どこへと行ってしまうのか？。——わが国のみならず、このような問というのは、古代東方世界にあっては、決して学とはなり得なかったのである。生活が、とうに学を消化していたからであり、そして、実は、現在も、それはそうなのである。しかし、明らかに、私達は、東方の生活者を知る機会を激減させている。歌を唄わなくなった、というより、歌が、どうしようもなく下手になったので、下手な歌こそ歌なのだ、と言い張ってしまっているためである。死は、生とされ、醜は、美とされてしまっている。いや、そうではない。死も生も、元来、東方にはなかったのである。無論、今もない。それを、人為が、気ままに区分をし、説明ということを発明に及んで、そこに言葉をすべて投入したのである。説明や解説に費やされる言葉は、苦しむ一方で、およそ歌など唄えやしない。歌のないところに、生活はなかり。生活とは、誰にしたところで、表現だからである。

わが国には、大昔、文字がなかった、ということ、言葉だけが自立していた、ということ、この事実が私達に黙示する意義は、私には、昼も夜も絶えない海鳴り・山鳴りのみの、音の単純さを聞かせないではない。海が鳴り、山が鳴る、その単純な音が、私にすきとおって響くのは、おそらく、私が海の音であり、山の音だからなのに違いない。神の歌とは、そうしたもののなのだろう。言葉の自立というのは、その言葉のとおり、言葉が世界なのであり、言葉を使うとか、言葉を知るとかといった、さかしらを指していようはずがない。ただ、まっすぐに、言葉を生きる、ということ、それ故に、その生活には、微小な恐怖も不安もないということ、それを「黙示」された意義と言え、言えなくもなかり、と私は思う。実際は、海が、今も鳴り、山が昨日を今日と鳴る、その前に、意義などは、けし飛んでしまっているのだろう。言霊と呼ぶ言葉など、そういう、世界の音楽における楽典に、どうしてあったりするだろう。形而下のことが皆無であったはずなのだから。生活が、歌だったのだから。私達が、即、表現だったのであるから。

◎うつそみの人にあるわれや明日よりは二上山を弟世とわが見む¹⁰⁾

大來皇女

事実を、素直に、事実とすること、「二上山」を、事実の「山」とすること、それには皇女自身が、「うつそみの」里に居てはなるまい。「山」の人となって、はじめて、弟（大津皇子）を聞くことができる、と言っている。皇女は、唄う静けさの中でそのことができる、と言っているのである。ここに、この歌のリアリティがある。皇女の生活がある。表現が、ある。言霊が、紛れようもなく、響いている。文字が、創造のさなかに生まれようとしている。

歌を唄う、ということ、それは、誰もが、忘れた歌を思い出す、ということに尽きるのではあるまいか。そして、このことは、私達の誰にもできるのだ、ということ、を、同様に思い出すことなのではあるまいか。海鳴りや山鳴りが、こらえようもなく私達に懐しいのは、他でもない、私達が海の歌、山の音だからではなかろうか。楷書を書け、とか、「手書き」でスミマセン、などとつぶやく時など、私達には、もともと少しもないのであろう。私達は、私達のウチなる生命^{いのち}を、一つ覚えのように尊敬すれば、もう、それだけで、あり余る生活の豊饒が確約されるのであろう。生命は、歌を生きているからである。

思い出すということについて言えば、私達は、哲学については、思い出さなくともよいように思う。第一、そういう言葉も文字も、私達にはないのである。私達は、何のことはない、日本を思い出せば、それで、じゅうぶんなのだ、と私は思う。環境のこと、少子化のこと、高齢化のこと、社会不安のこと、等々、現代、わが国の直面する、所謂、課題は、決して少なくないし、且つ、錯雑・粉糾している。そのように、どうしても、私達にはみえてしまうのである。思えてしまうものである。——私達は、眼や耳を、事実からそらせてはならないと、私は思う。言霊や文字が文化であるのは、そして、健康の法でもあるやに思われるのは、ひとえに、それが、「単純な世の事実」であるからに違いない。真の宗教が、人々の口吻を、歌へと昇華させるのは、かかる地平を措いて他にはないのであろう。日本は、その「単純」さを、肇国以来、気が遠くなるほど待っているのである。——いじらしいのである。——了

〈注〉

1) 「萬葉集」894。山上憶良。「好去好來の歌一首」の冒頭。

『萬葉集』二。103頁。日本古典文學大系5。昭和42年10月15日、第8発行。岩波書店。

2) 「答案落第」。太宰治。

『太宰治随想集』。89～90頁。昭和二十三年七月十三日、再版発行。若草書房。

3) 「歌意考」。賀茂真淵。

『近世神道論・前期國學』所収。349頁。日本思想大系39。

1972年7月25日、第一刷発行。岩波書店。

4) 3) に同じ。

5) 「萬葉集」4401。國造小縣郡の他田舎人大島。

『萬葉集』四。437頁。日本古典文學大系7。昭和43年2月10日、第8刷発行。岩波書店。

6) 「新文章読本」 3 頁。川端康成。

昭和五十四年十一月二十五日、三十刷、発行。新潮文庫・草 1 V。新潮社。

7) 「音について」。太宰治。

『太宰治全集』・第十卷。86頁。昭和五十二年二月二十五日、初版発行。筑摩書房。

8) 「一日の勞苦」。太宰治。

『太宰治全集』・第十卷。105頁。昭和五十二年二月二十五日、初版発行。筑摩書房。

9) 「古典龍頭蛇尾」。太宰治。

『太宰治全集』・第十卷。72頁。昭和五十二年二月二十五日、初版発行。筑摩書房。

10) 「萬葉集」 165。大來皇女。「大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時、大來皇女の哀しみ傷む御作歌二首」のうち。

『萬葉集』一。97頁。日本古典文學大系 4。昭和43年 1 月25日、第15刷発行。岩波書店。

(平成13年11月 1 日受理)